
マイライフ・マイアフター

のーちやる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マイライフ・マイアフター

【Nコード】

N5507N

【作者名】

のーちやる

【あらすじ】

突然召喚された22歳女性のカホは、異世界で少年に体に乗っ取られてしまう。その後自分の体は、行方不明。今は、その相手の少年の体の中に。異世界トリップ NL BL いろいろ出てくる話です。

登場人物・第1話 入れ替わる

異世界トリップファンタジー B L N L 何でもアリなお話

登場人物

上坂 カホ (コウサカ カホ) 22歳 女性。 茶髪 茶目

身長 164cm

容姿は特別かけ離れた美人でなく、普通に美人。
ひとり暮らしが長いので、料理関係はバツチリ。
苦手は掃除。

趣味は、弓道と合気道。あまり力を使わなくてもいい運動が得意。

職業 服飾デザイナー

リオン・ラセンティス 30歳 (見た目10代) 男の子。 金髪
碧眼

ほわほわな天使のイメージ

本人は自分が嫌。身長 150cm

好きな男性がいて、女性になりたがっていた。

バーシス・ラセンティス 77歳(見た目20代後半) 男性

黒髪 茶目

身長 2m 魔術も使える王都の騎士

W隊 隊長

リオンの父親役

同性婚で相手はレナン

レナン・ラセンティス 75歳（見た目20代後半） 男性 金髪
茶目

W隊 副隊長

身長180cm 魔術も使える王都の騎士

リオンの母親役

リオンは亡き姉の子。養子にしている。

フィルティオ・レドニール（通称名 フォルティー・伝説の騎士
さま）

80歳（見た目20代後半）男性 黒髪 蒼目
身長185cm いろいろと伝説を持っている

謎の魔術師。騎士としても戦える。

ラプーシアを拠点に放浪中。あちこちで浮名が

絶えない。

有名な騎士として名が通っている。本人は全く

無沈着。

リオンの想い人。

世界観

世界は7つの国で出来ている。

主人公カホのいる国は、その1つ海沿いの国 ラプーシア。

同性婚もあり。魔法あり。両性、人魚に騎士と何でもありな
世界。

寿命は、種族ごとに違うが、大抵は300歳平均。150歳
位が日本でいう40歳代。

ひっくり返っていた可愛らしいほわほわな天使を思い浮かべそうな容姿の金髪碧眼の子は、慌てて立ち上がりつつも、カホを見て呆けている。その顔さえ可愛らしい。

見た目は13、4歳。中学生くらいだ。

「あの、ここはどこですか？」

言葉通じるかな？英語がいいかな？なんてカホは考えながらも、相手よりも年上だからと冷静になり尋ねてみる。

箱の上に手を置いたカホは、彼なのか彼女なのか分からないが、可愛らしい金髪碧眼の天使を見つめた。

天使のような子は驚いていた顔から、徐々に嬉しそうな顔へと変わる。

「ぼ、僕、成功したんだ」

動揺していた彼は、立ち上がるとびよんぴよん跳ねて喜びだす。

（あ、僕って言うてる。男の子なんだ。凄い可愛い。女の子みたいだ。凄い喜んでるけど・・・）

「ま、待って。喜んでる最中だけど。もしかして、私を呼んだのは貴方？」

「そうだよ。フォルティー様の理想を思い浮かべて召喚したのは、僕だよ」

「え？フォルティー様？召喚？どういうこと？」

疑問を浮かべているカホを無視し、カホの前まで歩みよりにっこりと笑顔を作る。

「え？何？」

「協力お願いします」

「なんの？」

何がなんだかわからないまま、急に体が硬直し、身動きが出来ないカホは

彼に両手をぎゅっと握りしめられ気を失ってしまった。

彼女が次に気が付いた時、心配そうな大人の男性の顔があった。

20代後半の優しい顔。先ほどの天使のような金髪の少年が大人になったようなイケメンだ。

「大丈夫かい？」

「はい」

ゆっくりと上半身を起こして、周囲を見渡す。

見るもの全て先ほどの部屋のまま。

次にその男性をじっと見つめると彼は申し訳なさそうにため息を吐いた。

「すまないな。君を呼んだ張本人は、もう行ってしまったよ」

「あの、すみませんが、まったく話が見えません。最初からお話して頂けませんか？」

今の状況が全く分からないカホが、説明をして欲しくて声を荒げる。だが、おかしいことに気付いた。

声が澄んだ可愛らしい声。とても自分の以前の女性らしくなく、とても中性的な。

両手を見て目を見張り、自分の出で立ちを確認しながら首を傾げる。

（なんだろう。手が小さくなった気がする。体もなんだかおかしい。服装も違う）

「そうだな。順を追って話すよ。まずは、俺はレナン・ラセンティス。君は、俺の息子に野望の為だけに異世界から召喚させられた。息子と言っても、姉の子なんだけど。その子の名前は、リオン」

「い、異世界？」

「そう。君の本来の姿は、あの子の憧れる男性の理想の女性だった。だから、君を召喚し、その・・・」

言い難そうにする男性は、手鏡を彼女に手渡してくれた。

その手鏡を覗いて、「ひっ」と声を上げ、カホは驚いて手鏡を危うく落としそうになる。

「わ、わ、私が金髪の天使になってる」

手を顔に添えながら、髪を引っ張ったりして試してみるが、痛みを感じる。

自分の顔とは到底違うつくり。

「天使かどうかは、別として。君の体に乗っ取って、あの子は憧れの男を追いかけて行ってしまったんだよ」

ため息を吐きながら男性は、カホを見つめる。

「ええ、なんですって」

（私の体で？）

「ちなみに、そのリオンが荷物抱えて行くところをすれ違ったのだけれど、君はかなりスタイルのいい女性なんだね」

申し訳なさそうな顔から一遍、ニヤリと笑う顔に彼女は、近くにあった紙束を投げつけた。

「どうしてくれるのよ。貴方の息子なんでしょ？私の体返して。貴方の子を連れ戻して」

（天使の顔して、男なんて嫌。どうせなら、逞しい男らしい方がいい

いじゃない。これじゃあ、女の子と間違われそうで、嫌。22年間の慣れ親しんだ私の体〜)

涙目で訴えたものの、男性は投げられた枕を片手に

「すまない。あいつは魔術師で、腕が立つ。追えなかったんだ。あいつが、憧れの男に振られて泣いて戻るまで待つてくれないか？」

「はあああ？」

男性の申し出に、カホはどうしようも出来ないことを悟って、その場に倒れた。

意識を飛ばしたわけではなく、何とも言えない脱力感で。

(私の体・・・)

第2話

待ち人来ず

カホが召喚されたのは5日前。

リオンと出会って入れ替わってから目が覚めたのは、当日から3日後。

「じゃあ、私がレナンさんに初めて会ったのは、リオンと入れ替わってから3日も経っていたの？」

レナンと出会って2日目の昼食時に聞かされたカホは、驚いた。

「そうなんだよ。リオンも他人の体に魂を交換したから、どうやらあの研究室で倒れていたようなんだ。俺と今は仕事で城に行っているけれど、パートナーのバーシスは、仕事で家を空けていた。

この屋敷の管理をしている執事から、リオンの行方が分からないと連絡が来て、俺が駆け付けた時に、あの子は、荷物を馬に乗せているところだった」

「.....」

「初めはスタイルのいい美人さんが、何故我が家の馬に荷物を乗せているのか詰め寄ったんだよ。

そうしたら、リオンが白状した。

研究室で倒れている自分の体と入れ替わった君の様子を頼まれているうちに、あの子はそのまま逃げた」

肩を竦める彼に、カホは頷いた。

「あの子がフォルティという伝説の騎士と言われている男に憧れを持ったのは、2年前だね。

城に俺に会いに来た時に、あの可愛い容姿のせいで誘拐されそうになった。

そこを彼に助けられたことがきつかけなんだ」

「はあ・・・、それと私の体と何の関係なんでしょうか？」

「前もって話すけど。君は異世界から召喚されて来たから、同じ世界観なのかは分からないけれど。」

この国は、同性でも結婚出来る。俺も同じで、パートナーは男だ。」

「ええ・・・、そうなんですか」

ティーカップを両手に持ち、カホは目を瞬かせる。

苦笑しながらレナンは、話を続けた。

「憧れがいつの間にか恋愛になったようなんだ。」

父親くらいの年齢の男にすっかり上せてしまつてね。

2週間前に、1年ぶりに彼が戻ってきたものだから、会いに行ったけれど

彼は男女どちらも美人系の人間が好きだとかで、可愛いあの子は眼中になかったという話で、

振られたそうなんだ」

「はあ」

「その先は、なんとなく分かるだろう？」

何を考えているのだから。異世界から彼の理想の人間を召喚し

入れ替わる気満々で、君を呼び出したというのがあの子から聞いた話だ」

話し終わるレナンの前で、カホは大きくため息を吐いた。

「そう。私は他人の恋の為に、勝手に呼ばれて勝手に体を取られたわけね」

「はははは」

「笑い事じゃないです。もう！私の体。あ・・・もしかして上手く

いった場合はどうするの」

「え・・はははは」

「はははじゃない」

ムツと頬を膨らませると、レナンは苦笑する。

「リオンの顔で睨まれても、居なくなつたという実感は沸かないなあ。

とにかく探しには行けないから。待つしかないよ。リオンが出て行つてから既に2日。

フォルティーも王の勅命で、出立している。彼は半年後に戻ることになってるから。

遅くとも半年後には会えるかと」

「半年」

ますます怪訝な顔になるカホに、気を効かせるつもりで執事は、デザートを侍女に運ばせたのだった。

その後はリオンの部屋に案内され、リオンとして生活を余儀なくされた。

「姿はリオンですが、中身はカホさんなので、屋敷内はカホさんとして扱い、

屋敷から外に出るような時は、リオンということにさせて頂いてもいいですか？」

「そうよね。この容姿で突然別の名前だと、皆も困るわよね。分かつたわ、リオンになりきるわ」

「普段からリオンのフリをしてくれるということだね。」

カホが頷くと、レナンも頷く。

「では、こちらの執事のリトリーに屋敷のことは任せよう。カホのこと、頼む」

後ろで控えていた執事は、にっこりと笑い頭を下げた。

「畏まりました」

その様子は、まさしく昔のヨーロッパの一幕のよう。

（はあ、執事がいるなんて、凄い世界だね。）

第3話 半年間の過ごし方

泣いてもどうすることは出来ない。

カホは大きく深呼吸する。

半年をなんとか過ごす決意をする。

しかし、可愛らしい容姿で男の子の体。

(自分の体だと思えず、直視出来ないし、全てが思い出しても恥ずかしい)

初めて体を拭くことになり、体の拭き方を教えてもらった時は、自分の体に中々触れることが出来ず

お湯の入った陶器のポットと人間1人入れそうな桶を目の前にかなり悩んだものだ。

この体に慣れて、半年付き合わなくてはいけない。

「レナンさん、私は半年何をして過ごすのがいいですか？」

「そうだね。君の姿はリオンだから……。」

レナンは考え込み、執事と耳打ちする。

「そうですね。私は屋敷内と屋敷内で働いている者達の顔を覚えて頂くこと。」

後は……学校は、記憶喪失ということで、過ごして頂くのは？」

「学校？」

「はい。リオン様は、大変優秀な魔術師で魔法学校では、ハイクラスです。」

ですが、カホ様は魔術は何も出来ません。初歩を教えている学校へ行く手続きをしましょう。」

にこやかに爽やかに執事は説明する。その違和感にカホは気付く。

「待って。もしかして、私がこのままの姿で過ごす可能性が大きく

て魔術を習えと？」

カホは、たかだか半年なのに学校へ通わせて魔術を習わせようとする執事の思惑に直感で問い詰めた。

「これは、凄い。私の先の考えを当てるとは」

執事リトリーは、見た目40代の渋くて温和なイメージの120歳のおじ様。

この世界は、カホの世界の3倍長生きの世界で、見ただ目で判断は出来ない。

そのおじ様がカホを見て驚いた。

「なんとなく……。おふたりは、私が元の体を取り戻せないと察してませんか？」

しばらく沈黙が続き……。

「ははは、実はそうなんだ。そう思っていたりするんだ」

「私も。リオン様のことですから、フォルティー様の寝所に忍び込むことくらいやっているかもしれませぬ。そうなると、元の体に戻っても……その……」

彼らの言わんとしていることが、よく分かるからこそ、カホは叫んだ。

「……………私の体へ。早く戻ってきて〜」

どこにいるのか分からないリオンを探すよりは、待つしかないけれ

ど。

腹立たしいリオンは、監督不行き届きだとレナンに散々お小言を言いつつ

執事に宥められていた。

レナンには、リオンの顔でお小言を言われたことがかなり笑えたと後で言われて

カホが戦いを挑みそうになった。

「元気になったところで、夕食にしましょう。侍女には手配をさせていますが、そろそろ良い頃かと」

彼は上着の内側から懐中時計を取り出し時刻を確認する。

どうやら時間は、元の世界と同じ24時間だとカホは気付いた。

食堂に招待されると、10畳ほどの洋室に長方形のテーブルと左右3客と上座に1客の椅子が並べてある。家族的な人数で食事をとる部屋だ。

並べられている食事も洋食に近い。

喜んだのもつかの間、見た目と味が違う。

(りんごだと思ってかぶりついたら、ももだったような感覚ね)

カホは見た目に騙されないようにと思いつつも、かなり頭の中を混乱させて食事を食べる。

鶏肉に見える牛肉の味にも慣れ始めた頃、執事が主の帰還を伝えた。

「ただいま」

かなり低いバリトン声を響かせて、笑顔で大きな男が入ってきた。見るからに逞しい。

「親として情けなくだな・・・」

レナンが言葉を付け加えて、肩を落とす。

「もう、親なのに」

「すまない。ここでの生活は快適に出来るよう、協力する」

バーシスが頭を下げるので、カホは執事が渡してくれた紅茶に近い飲み物が入ったカップを受け取り

黙って飲んで落ち着きを取り戻した。

わざと気を紛らわせてくれた執事に感謝しつつも、腸煮えたぎる思いだ。

その後快適に過ごす為、侍女達から余った布や端切れを貰い気分転換に興味と実益を重ねたことをすることにした。

一緒にこちらの世界に持ってきた箱から、道具を出す

カホは自分の天職である服作りに没頭することにした。

元々リオンの部屋に案内されたカホは

「ほとんど全部道具は揃っているから良かった。手の力で使う小型マシン最高。」

電気がない世界だから、これは重宝ものね」

いろいろ複雑な気持ちはあるものの、現実逃避の為に生地を鋏でジヤキジヤキ切り始めた。

その様子を執事と侍女は眺めつつ部屋の扉を閉める。

「不思議ですね。リオン様が女の子に見えます」

「そうだね。あの容姿で男の子だというのが不思議でしたが、裁縫をしている姿が違和感ないですね」

「見た目とすることがようやく合ったというところでしょうか？」

「リオン様本人には、聞かせられませんね」

学校は、今は休暇期間（現代でいうところの夏休み）ということ、執事が転校手続きをしている。

新学期が始まれば、初等教育の学校へ移るらしい。

数日暇だと聞いて、カホはますます服飾作りに没頭。

可愛らしいメイド服を完成させると、その出来栄に侍女達が感動し執事に今使用のものと変更するよう訴えたことは、レナンとバーシスに衝撃を与えた。

第4話 学校

学校の手続きが終わったと執事が知らせを持ってカホの部屋にやってきた。

今までリオンが通っていた学校から、初歩を教えていることとレベルが不安定な者達が通う学校。

「こちらがその制服です。お屋敷から歩いて15分です。明日から編入出来ます」

執事が手渡す制服をカホは受け取り、早速広げてみる。

男の子用なので、紺色のズボンに白のシャツ、ジャケットは腰までで、中に燕尾服のような薄手のジャケットを着るようだ。その上には紺色のマント。

「へえ、ファンタジーって感じの制服ね。マントがある。これ、内側にポケット作りたいな」

（ああ、凄いファンタジーらしい。周囲は現代と変わらない服装だけど、この屋敷を出ると

やはり不思議な世界だわ。屋敷から見える街並みは、昔のヨーロッパ。歩いている人は、女性はワンピースの長いバージョン着てるし、靴は革靴が主流なんだ）

気落ちしつつ趣味と実益に没頭していたカホは、少しずつ周囲に慣れるように気をつけている。

泣いて過ごしても仕方がないから、今を楽しみ、半年後には元に戻る可能性を信じていくことに決めたのだ。

袖を通して喜んでいるカホに、侍女達も喜んでいる。

「カホ様、少しでも魔術が使えるようになると生活が便利ですよ」
侍女達は、それほど魔力が強くないのか、普段は使わないが
それなりにいざという時使える。

「うん、そう思う。私の世界では魔法とかないもの。使えたらいろいろ便利そうね」

当日。

気持ちのよいくらいの朝。執事から弁当（サンドイッチと瓶に入った飲み物）を受け取ると
地図を受け取り学校へ向かう。初日は送るというレナン達には断わり、街並みを見学すること
道を覚えることにしたのだ。

可愛い容姿なので、いつものリオンと違い魔術が使えないカホは襲われる心配があるので、
実は門に入るまでは背後に執事がつけていたことは秘密だ。

屋敷は、王都より少し端側にあるが、周辺は隊長やそれに近いクラス
の屋敷ばかり。

今住んでいる地区は貴族ばかりだということが、ここ数日で分かった。
た。

（レナンさん達も貴族なんだ）

目的地は、庶民一般人が多くいる街中にある。執事が言うように1
5分歩いたところで学校の門が見えた。
大きな門の前には門番が立っていた。

「え〜と。貴方は編入されたりオン・ラセンティス君だね」

門番の横には、教会の神父を思わせる格好の白髪交じりの男性が立
っていて、リオンの姿のカホを見つけると、声を掛けてきた。

「あ、はい」

「大変だったそうだね。休暇の期間に記憶を失ったと聞いています。魔術のことも忘れていたのか。」

早く思い出すといいですね。君は以前通っていた学校ではかなり優秀な生徒だと聞いています。」

忘れてしまったとは、もったいない話です。貴方の担任のベルデイオ先生から話しは伺っています。」

こちらの学校では、私達も協力しますので頑張ってください」

優しい言葉を掛けられ、本当は基礎すら知らないカホは、申し訳なくなる。

（うう、本当のリオンでなくすみません。でも、そのリオンのせいなので許してください）

門を通り抜けると庭園があり、校舎が何棟が見える。木々もあり自然と一体になった学校だ。

（凄い。初歩の初歩を教える学校って、聞いてたけど広い。大学のイメージだわ。レンガで作られている校舎とか木の校舎とか風情があるわ）

感激しながら歩いていくと、途中職員室へ寄り、担任と顔合わせし、教室へ行く話しになった。

「それでは、後は先生に任せますね。」

「はい、ボドユー校長」

「ええ。校長先生なんですか？」

「知らなかったのか？」

「はい。すみません。有難うございました」

「ははは。それでは、またね。リオン君」

門から話をしていた男性が、実は校長先生だと知って、慌ててお礼を言っ分かれた。

（まさか、この白髪交じりのおじさんが校長先生だったなんて、つ

ゆ知らず)

「俺は担任のリューシュ・シンだ。よろしくな」

「リオン・ラセンティスです。よろしくお願ひします」

茶髪イケメン先生と握手して、教室へ向かった。

(茶髪なんだけど、外人顔で、目は蒼色か。いろいろな人間がいるなあ)

ガラスと扉を開けると、大学の講義室のような部屋。

1クラス年齢も様々で、25人程。

「席につけよ。新しい生徒を紹介する。リオン・ラセンティス君だ。学習に関して記憶喪失などがある為、そこところは協力してくれ。仲間として、仲良くすること。」

それだけを黒板前で紹介をすると、カホに向かい挨拶するよう促した。

「あ・・と。リオン・ラセンティスです。よろしくお願ひします」
頭を下げると、「よろしく」と何人かに言われて一番後ろの席にいた。

早速、今日の授業内容が黒板に書かれ、授業が始まった。

この学校は、魔術があるかないか、もしくは微妙、不安定な者が集まっている。

だから年齢も様々。

幼児年齢から大人まで。

カホのクラスは、同じ世代の子供達が25人集められていた。

「リオン。俺はバラス・ラディーだ」

「私は、ユーラ・ケレン」

席に近い子供達が自己紹介して、仲間に入れてくれた。

「あ、魔術忘れてしまって迷惑掛けるけど、よろしく」
カホが笑うと、周囲も笑ってくれた。

「大変だな。せつかく何年も掛けて魔術を取得したのに、大掛かりな魔術使って記憶喪失になるなんて」

「本当。もったいない。でも、ここで頑張ればいいよ」

「うん。有難う」

早速出来た友達と打ち解け、カホには未知の世界である

初歩の魔術の使い方や文字、魔法の呪文を少しずつ覚えていくことにした。

魔法の実践の授業では、グランドに出て実際に呪文を言いながら魔力を使う。

皆が上手くいったりそうでなかったりと四苦八苦している中見ていたカホは呪文も暗記出来ずにいた。

（TVや小説のように、口を動かして思い通りになるとか、指を一本出して思い浮かべると

出来ないものなのかしら？呪文が面倒だなあ）

物を動かす呪文を習い、目の前の箒を浮かべる子供達の中、カホはひとさし指を箒に向けて

「浮かべ」と小さく口にしてみた。

（TVや小説のようにには、無理かな？）

動かない前提で試してみた。

「ええっ？」

簿が浮かび、自分のひとさし指辺りで止まる。

それをクラスの全員が息を飲んで見守った。

(呪文なしで、浮かんだ)

「どうということなんだろ・・・」

出来てしまった本人が一番驚いた。

「凄い。もう覚えちゃったんだ」

ひとりが憧れの眼差しで見してきた。

「う〜ん・・・。少し思い出したのかも」

慌てて言いつくろろが

「そうなんだ。もともと凄い人なんですよ。羨ましいな」

元々、リオンは有名な学校でハイクラスの間。忘れてしまった魔術を思い出す為に来ているということ。少し距離を取られていることをようやく理解した。

(せっかく仲良くなれたのに、距離を置かれたら困るわ)

慌てて、出来ない生徒や不安定な生徒にコツを教える側に徹し、少しずつ距離を縮めた。

「頭の中でイメージしながら、呪文を言ってみて」

カホがゆっくりとタイミングを教えると、生徒たちも少しづつレベルが上がった。

「リオン。これから俺のアシスタントにどうだ？」

先生がすっかり感心している。

「いえ。まだこれから思い出さないといけないので」

「はははは。そうか、残念」

一緒にお昼を食べ、初日は楽しく過ごすことが出来た。

第5話 それなりに

なんとか学校生活をクリア。数日経ったが、大きく変わったことはない。

それだけでカホは安堵する。

こちらの世界の常識は全く分からない。

屋敷内でも今までの生活常識がたまに出では、侍女さんや執事を驚かせているので

毎日の学校生活は冷や冷や。

「どうですか？」

「まあ、なんとか常識は笑われながらも教えて頂いてます」

「そうですか。記憶を失くすという話は良い案だったようですね」

「あ、そのことなんだけど。私、かなり魔力があるそうです」

学校から戻り、お弁当の袋を執事に手渡ししながら、カホは事のあらましを掻い摘んで説明する。

「呪文を唱えなくても、考えた言葉を言うだけで出来ると」

「そうなの。最初は何かの偶然かと思っていたけど、今日確信出来た」

「リオン様は、必ず呪文を唱えてましたね」

「え？リオンは違うの？」

「どうやら、貴女自身に魔力があるのかもしれない。魔力があったからこそ、

リオン様の召喚に反応したということも考えられますね」

執事の言葉に、カホは顰め面。魔力があっても、元の世界では使え

そうにないものだ。

「カホ様、そろそろ着替えを」

「はい」

私服に着替えるよう侍女に言われながら、部屋へ駈けて行く。

彼女の後姿が見えなくなつたところで、執事は懐中時計を取り出し蓋をパチンと開け

相手の姿を確認すると

「レナン様、ご報告があります」

「どうしたんだ？リトリー」

バサッ。

マントを取り、上着を外し裸になると、人間が一人入れる桶の中に入り

ポットの入った湯あみ用のお湯を小さな桶に入れ、タオルを浸して絞り、体を満面なく拭く。

最後にそのお湯を少しづつ体に掛けて、タオルで水分を拭き取ると私服へ着替える。

（お風呂は、週1で、普段は温泉に入るかこの拭き取りなもの。なんだかなあ）

屋敷には、お風呂はない。

お風呂事態が家の中ということは考えられないらしい。

水分を家の中で扱うということはない。

キッチンもなるべく外の出入りが出来る近くにあり、それを食事を採る中の部屋へ運ぶくらいなのだ。

（屋敷事態が、レンガとコンクリートに似たもの、木で出来ているし、水分はカビが生えるから

難しいのかもしれないわね)

キッチンで何かおやつを頂こうと、訪ねていくと、自分のデザインした可愛いメイド服の侍女達がキッチン担当の給仕係達やシェフ達と交代でお茶をしているところだった。

「あ、私も何かない？」

ひょこつと顔を出すと、自分の事情を知っている侍女達と知らない給仕係とシェフ達がこちらを見る。

「あれ？リオン様。レアがお部屋へお茶をお持ちしているはずですよ」

「あ、あれ。もう食べた。お煎餅とかない？」

(洋菓子ばかりで、ポテチとかお煎餅が恋しいな)

「……お煎餅？」

「うん。ない？」

「リオン様。それは異国のお菓子ですか？」

「聞いたことないです」

最初は、リオン自体が我儘なお坊ちゃまだったことで、警戒されていたが

侍女さん達が、今のリオン様は変わられたと教えてくれたことで

最近は、誰とでも話せるようになっていた。

「そうなんだ。似たような材料がないもんね。あ、でも芋餅くらい出来るかな？」

「芋餅？」

(あ、でも塩はあるけど醤油はないんだよねえ。)

片栗粉に似たようなものもないが、でんぷんが豊富そんなもので代用出来ると思ったカホは

早速、シエフに掛け合い芋を分けてもらう。

「それで芋餅を？」

「そう。こつちには餅自体ないからね。この芋でそれが出来るか試してみる」

鍋に水を入れ、15個の芋をゴロゴロと入れ火にかける。

茹でて柔らかくなったことを串で芋を刺して確かめると、ザルにあげ、熱いうちに皮を剥く。

片栗粉のような芋も混ぜておいたので、一緒に鍋の中で練ると粘り気のあるものになる。それをお団子サイズに丸めて厚みのある小判のように平たくする。

バターをフライパンに入れ、餅をいくつか入れ、両面を焼いて出来上がり。

「どう？」

「へえ、外側はカリッとしていて、中は柔らかいですね」

意外な作り方に、皆で試食をし、味が足りないとのことでは話しは終わった。

(たぶん、醤油味があるともっと美味しいと思う。醤油の作り方は記憶に・・・)

「あ、そういえば」

自室へ戻り、こちらの世界へ持ってきた箱を漁ると、いつか自給自足で作りたいたと買っておいだ単行本サイズの本が出てきた。

「これこれ。自給自足で作る料理」

パラパラ捲ると、デザートから100種類近くのものが載っていた。
「醤油は何が必要かな」

既に頭の中は日本の料理のことで、頭がいっぱいになっていた。

その頃仕事先の城の執務室で、レナンは執事からの報告を休憩しているバーシスに話をしていた。

屋敷のことやカホのこと、毎日の様子を、普段は中々屋敷に戻れない2人へ報告がされている。

「リオンよりも魔術が優れているということか？」

「そうだな。この国に呪文も唱えずに魔術を使える人間は知らない」

「あの伝説の騎士フォルティでも、見たことないな」

「あの規格外の男でも、呪文は唱えていたはずだ」

2人で、沈黙になると、彼らの秘書官が報告書を持ってきた。

「女性になったリオン様を追っていた者からです」

隊長であるバーシスは先に小さな紙きれを受け取り、唸った。

「どうした？」

「あのバカ（フォルティ）。あれほど、警告して手紙を送ったのに、関係を持つちまいやがった」

「・・・カホには言えませぬね」

「まったくだ」

第6話 疑似体験

芋餅を作る前日の話のことだ。

「う・ん」

カホはいつものようにリオンの部屋の2人分はある広さのベッドに入り、就寝していた。

眠りに入った途端、体が火照り暑くて寝返りを何度もうった。

(何だろう。体がどうにかなりそうなくらい)

体中がとにかく暑い。

急激に力が体に加わり気を失うようにベッドに体が沈み、次に目覚めると

どこか別の天井が見える。

(あれ？元の世界？)

はつきりと映らず、ぼんやりとした視界。

『あれ？』

目の前には黒髪の男性の姿が・・・。

「リオン、1度しか言わない。最初で最後だ」

「うん」

(自分なのに、自分の声で自分でない意志が答えている)

男性はイケメンというよりは、男らしい顔だ。女性が好きそうな逞しさ。

声もかなりキュンとくる。瞳は蒼くて、神秘的な感じがする。

凄く間近に感じる顔の位置。

『えーと、どういうことなんだろう？』

裸の男が覆いかぶさってくる気配に、茫然とする。

「フォル・・・」

自分の声かと思うほど甘い囁きで相手を呼び、白い両腕が相手の首へと回される行動に目を見張り

我に返る。

（今のつて、いわゆる年齢制限の行い？）

「うそよ。夢だよ」

自分の体が勝手に動き、自分の聞きなれた声が甘く、自分ではありえない姿態に
かなりショックだ。

目を開けると、元のリオンの部屋のベッドの上。

（今の何。予知夢？それとも・・・今本当の私の体がピンチ？リオンが私の体でしようとしてること？）

汗をたっぷり掻いたことで起き上がり、喉の渴きも覚え
常備されている飲み水のポットが置いてあるテーブルまでよろよろ
と歩き、

コップに水を注いでゴキユツと喉を鳴らして水を飲みこんだ。

「はあ」

大きく息を吐き、明日の学校のことを頭を巡り、汗でべたべたする
パジャマを脱ぎ椅子に掛けると

箆笥に掛けられているもう一枚のパジャマを取り出し着替える。
重い足取りで、再度ベッドへ潜り込んだ。

（夢だよ、夢。明日も学校あるし、明日考えよう）

この日の夜の出来事は、後に衝撃の事実として対峙することになる。

次の日。いつもの朝。

（昨日の夢は、ただの夢よ）

生々しい夢だっただけに、まだショックは大きい。

それでもお腹は空くわけで、常備された水を洗顔用の桶に入れて顔を洗う。

いつの間にか背後に立っていた侍女は、タオルを渡してくれて顔を拭く。

（いつもタイミングがいい頃に来るんだよな、侍女さん）

「おはようございます、カホ様」

「おはようございます、いつもグッドタイミングで、グツジョブですな」

笑顔で答えると、侍女は首を傾げた。

「ぐ？たい・・・ぐ？・・・じょ？」

「いい仕事してますねという意味よ」

「はあ・・・不思議な言葉ですね」

（英語は意味通じないのね。ま、異世界だから仕方がないよね）

いろいろ試したものの、日常語として会話がスムーズに出来たのは、日本語のみだった。

「おはようございます、カホ様」

朝食が終わる頃、侍女と入れ替わりに執事が食堂に入ってくる。

「おはようございます」

「どうしました？気分でも優れないですか？」

「ええ、まあ。夢見が悪くて」

「それは、昨夜は残念なことです。夢は所詮夢です。現実を楽しんでください」

執事はいつものようにお弁当の袋をカホに手渡した。

「今日は、良い日であるように」

こちらの世界での元気づけのまじないを施してくれる。

「有難うございます」

丁寧に頭を下げると、「これが本物のリオン様であれば、本当に改心したのだと喜ぶところです」

と残念だと愚痴を吐き出す執事に侍女が頷く。

「余程リオンは、皆さんの手を焼かせるお子さんだったようね」

「本当です。両親亡きことで、私どもは甘やかせて育ててしまったこと悔いています。」

ですが、カホ様のお蔭でリオン様の姿で私どもの理想の姿が見られて、実は感動していたりします」

「……………。やっぱり、元に戻らなくてもいいとか思ってるでしょ」

可愛らしい天使のような姿のリオンが、カホのように真面目に努力し、我儘を言わないことが

彼らは理想としている。リオン本人が聞いたら泣き出すかもしれない、自分の家の人たちの願望。

「……………。戻ってくださっても問題はないです。ただ、以前のリオン様ではなく今のようなりオン様でしたら、大歓迎」

「……………あ、そう」

（リオン、物凄く我儘だったということがよく分かるよ。キッチンでも最初は警戒されたもの）

「さて、行ってきます」
気を取り直して、カホは元気よく屋敷を出た。

第7話 リオンの見解

「随分可愛い天使が迷子なんだな」

これはリオンの過去。

まだ恋も知らない今から2年も前の話。

「綺麗な顔してやがる」

叔父に着替えを届けるところで、後少しで城の門が見えるというところ。

目の前には、気持ち悪いくらいの大男に呼び止められる。

ニヤニヤと口をだらしなくしている骨ばった男が道を塞ぐ。

その背後には、剣を肩に乗せて笑っている筋肉男。

壁際に追い詰められながら

ああ、自分はまた性の対象として狙われているのだと悟った。

その当時、リオンは3歳で両親を戦争で亡くし、叔父と養子縁組し養子になって25年の時だ。

母親に似た少年は、常に女性と間違えられるほどの可愛い容姿。これで男だと言われても、大抵相手は信じはしない。

この天使のような容姿のせいで何度か襲われることはしばしば。

そのことも叔父は心配し、彼に魔術を学ばせた。

自分を襲う敵を蹴散らせる強い力を持つために。

それでも恐怖心が先にくると、中々呪文が唱えられない。

「ぎゃあ」

「うわあ」

そんな壁際に追いやられて窮地のところへ、黒髪の男が颯爽と現れ彼を誘拐しようとした者達を一網打尽にした。

彼には救世主。惚れてしまうには十分な圧倒的な力と男らしい顔。ノーマルな彼の意識は虜になった。

「好きなんです」

彼が何者なのかを調べると、魔術師であり騎士でもあり、数々の伝説を作っているという

有名な男。容姿は男女が好くだろう男らしい顔。

叔父の仕事仲間でもあり、放浪していることが多く、王から勅命の仕事が入ると

戻ってくるという謎が多い人物だった。

あちこち旅をしているせいか、あちこちの国の街や村にも彼を慕う男女が多い。

そんな男が城に戻ると聞きつける度に、何度も告白した。

「バーシスとレナンの養い子か。俺は美人系で同じ歳前後の男女が好みだ。悪いが、お子様で可愛い系は却下」

現在30歳のリオンだが、この世界で30歳はまだまだ少年。カホの世界では13歳位の見た目。

誰もがフォルティーに告白する姿が、親に子供が好きだと言っている姿にしかうつらない。

恋愛ことだとは誰も思わないだろう。

随分とはつきりときつい言い方で何度もお断りされた。

だが、そんなことでは負けないと、彼は学習に力を入れ研究し……。

「パパ（レナンのこと）僕は、どうしてもフォルティ様の好きな容姿と体を手に入れたい」

「リオン。大人になれば、君も綺麗になるよ」

「今じゃなきゃ、フォルティは他の誰かに盗られちゃうよ」

「リオン。彼とは歳の差が……」

「僕は彼のもっとも好みの体と顔を手に入れてやる」

その後、リオンは実験をする前に国へ戻ってきていた彼に何度目かの告白をするが玉砕。

屋敷に戻り、研究室へこもると、今までの理論をまとめ、異世界召喚する決意をした。

「必ずフォルティが好きで容姿と体を手に入れてやる」

その執念は、魔法陣を素早く描き、長い呪文を唱えさせた。

一か八かで、成功するかは全く自信はなかった。

だが、恋する男の火事場の馬鹿力としか思えない行動。

魔法陣の中間に光の球が現れ、それが徐々に大きくなって大きな音と共に女性が現れた。

「ぼ、僕、成功したんだ」

美人と言えば美人の部類に入るだろう。凄い美人ではない。スタイ

ルはまずまず。

フォルティーが好みそうな女性だ。

彼女はリオンに何か言ってくるが、会話する時間すら惜しい。

「協力お願いします」

リオンは、自分の恋の成就の為に、過去の文献にあった魂の入れ替えの呪文を唱えてしまう。

「あ・・・」

リオンが目覚めた時、辺りは薄暗くこれから1日が始まる朝だった。魔法陣の上で、上体を起こすと目の前に天使の容姿をした自分の体が横たわっている。

「いつつ」

（体がだるい。頭も痛い。これが魂の入れ替え・・・）
しみじみと女性の体を実感する。

異世界の服装から覗く胸元。白い肌。大人の女性の体。

夢見たフォルティーの言っていた大人の女性。ほお・・・と、ため息を吐くが・・・

「ダメだ。力が出ない。魔力の使い過ぎだ」

ぐったりとした体は指一本動かさず、丸1日彼はそのまま眠りについていた。

次に目を覚ました時、部屋はそのまま。まだ誰にも気づかれていない。

「よかった・・・」

憧れの体を両腕で抱きしめる。

リオンは女性になった体を使い、フォルティーの元へ行くことしか考えていなかった。

「しまった。この異世界の服ではまずい。侍女の服を失敬するか。

女性に何か必要かも知識がなかった。うう・・・この日の為に召喚

しか学んでなかった僕は

抜けている……」

自分で自分を叱責しながら、必要だと思っものを皮袋に詰めていく。「馬は自分の馬で……。今日は、確か城にいたはずだから待ち伏せしかないか。」

いろいろ考えて馬に荷物を括り付けたところで、叔父に見つかった。彼は2日姿を見せず、行方が分からないリオンについて執事から連絡があり

急ぎよ仕事を休み、屋敷に戻ってきていたところだった。

「誰だ、君は」

自分の養子の所有している馬に、荷物を乗せている怪しい美人な女性。

女性だとしても盗みは許さない。そんな気持ちで近寄り

「僕だよ、パパ」

「?・・・その雰囲気はリオン?」

「そうだよ。僕、召喚と魂の入れ替えに成功したんだ」

「何?以前言っていた。好きな容姿と体を手に入れるという話か?」
何度も養い親の自分に言っていた願望の話。

「そうだよ」

「成功したのか?」

「そう。僕、こんなに上手くいくとは思わなかった」

「それじゃあ、お前の本当の体は?」

「今、僕の研究室で倒れてる。パパ、後をお願いするよ」

「ちよつと待て。行先だけでも」

馬に跨ったところで、レナンが馬の手綱を掴んで阻止。

馬が少し暴れるが、レナンの上手い手腕で直ぐに馬は落ち着く。

「決まってる。フォルティ様のところ。今、城に戻ってるはずだから行ってくる」

「待て」

「パパ、止めても無駄だよ。僕はこの体で押しかけ女房するから」

「うわ」

実の叔父に魔術を使い手を離させると、そのまま走り去って行った。

後に残されたレナンは、茫然だった。

姉に生き写しの美少年が、別の顔をした女性になったのだ。

慌てて研究室に入ると、見慣れた少年の体が横たわっている。

死んでいるのかと慌てて上体をゆっくり起こすが、目を開くことはない。

心配で胸辺りに顔を寄せ、耳を澄ますとスー・スーと息だけはしている。

生きている証だ。

「生きている・・・よかった」

そんな叔父と自分の体については頭になく、リオンは屋敷から飛ばしていた馬から降りると、

城の門辺りで目的の彼が出てくるのを待つことにした。

昼から出て来たので、かなり待ったと思う。

すっかり辺りが薄暗くなったところで、門から騎士達が出てくる。

馬で帰宅する者、そのまま独身寮へ戻る者の中に、旅支度をした騎士が目に入る。

「あれだ」

馬をその場で待機させ、真っ直ぐに彼に向かい飛びつく。

彼は驚いて、リオンの体を受け止めてはくれるが、リオンとは知らず謎の女性に抱きつかれてかなり困惑していた。

「誰だ、お前」

「へへへ、僕女になったんだよ。フォルティー様」

「何？」

「貴方の子供だって産める」

抱きつかれて、フォルティーは女性の顔を無理矢理自分に向けさせ、その顔に驚いた。

「お前、言葉づかいはレナンの養い子のようだが・・・この顔は？」

「ふふ。フォルティー様が好きな顔と体を手にいれたんだ」

もはや狂っているとしか思えない少年の言葉に、フォルティーは息を呑んだ。

そのやりとりは、数人の門番や兵士に見られていた。

数時間後に、養い親であるバーシスの耳に入ることになる。

第8話 半年後

カホがなんとか異世界の生活に慣れ親しんで、半年が経った。異世界ということだけで、平穩そのもの。

半年後には、きっと自分の世界に戻れると信じているだけに、今は観光旅行にでもきているとでも、考えを置き換えていた。

久しぶりに雨が降る日だった。

その日は珍しく養い親達であるレナンもバーシスも休暇で学校も祝日で休校日。

運が良いのか悪いのか、居間で3人がそれぞれ寛いでいるところ執事が慌てて扉を開けた。

「た、大変です。リオンと名乗る美女が・・・」

（美女？）

その名に3人が勢いよく立ち上がり、執事に詰め寄った。

「それで」

「はい。旦那様方に以前からお聞きしていた方だと思われませう」

美女の特長と名をリオンと言う女性について説明すると、彼らは本物のリオンだと悟る。

「それで」

「今、侍女達に部屋へ運ばせています。かなり危ない状態です」

リオンと名乗った女性は、かなり衰弱している様子で、温かい部屋へ運び、濡れた服を着替えさせているとのこと。

「行くぜ」

「はい」

バーシスとカホがその部屋へ走っていくと、執事は後を追いかけてうとしたレオンを呼び止めた。

「それで、旦那様。その女性ですが、どうもお腹が大きくて」

「何、それって」

「はい。たぶん、お子がいると思われます」

「……」

レオンは、直ぐにカホの顔（今はリオンの姿の）が浮かんだ。

「彼女は、見れば気が付くだろうな」

「はい」

急ぎよ医師が呼ばれ、屋敷内は慌ただしくなった。

リオンは、確かに戻ってきた。

だけでも、カホの体はこの半年でいろいろあったようで、傷だらけで自分の顔とも思えない化粧に、そして身重の体型。

なんとか母体も胎児も助かったのはいいが、何とも言えないものが残った。

「きになる点だが、お腹の子が誰の子かということ」

「カホが今元の体に戻ると、妊娠している姿になると……」

「……」

どうする？という事になった。

「一応、この手の魔術には詳しい人物が1人心当たりがいて、前から話がしてある。」

今ならチャンスで、その人物に連絡をとるぞ」

「ただ、元の世界へ戻す力はないから、そこだけは勘弁してくれ」
養い両親の2人は、何度も謝罪してくる。

今ならリオンが気絶していて、きっとスムーズに元の姿に戻れるだろう。

「でも、妊娠なんて。誰の子かも分からない。私の体なのに・・・」
自分の眠る姿を見ながら、ボロボロと涙を流すカホに屋敷の一同が同情した。

「僕は嫌だ」

気絶していたはずのリオンが呼吸を整えながら、こちらを見る。

「まだ言うか。このバカ息子」

バーシスが大声で怒鳴る。

「リオン。異世界召喚することは禁じられていることだ。自分の欲の為に人の人生を

巻き込むなんてどうかしている。姉さんだって悲しむ」

レナンは泣きそうな顔で、甥を見つめる。

「だ、だって、やっとフォルティー様の子が僕の中にいるんだ」
うっとりとした一言に、皆が驚きの声を挙げた。

「な、何？」

「まさか」

「それ、本当なの？想い人に会えたの？」

3人が問い詰めると、リオンはにっこりとほほ笑んだ。

「大いなる賭け。でも、やっと想いを伝えただけ、僕は娼婦に見られたみたいで、ぐすつ。」

気付いた時は、いなくなってた」

行動そのものがストーカーなので、3人がそれぞれ同じ事を思った。「ずっと一緒にいられると思ったのに。宿の奥さんに娼婦だって説明されてみたいで」

ほほ笑んだ笑顔も直ぐに涙顔になる。

「どのくらい一緒に？あいつは、いろいろ任務があつたはずだから。ずっと女性同伴では足手まといになるはずだぞ」

「うん。2日だけ。隣の国まで来ていたから、戻ろうにもお金無くて。その宿で働いて

お金を稼いで。戻るだけ稼いだら直ぐに戻ろうと思ったら、1か月して体調が崩れて、

しばらく宿の奥さんに世話になってた」

沈黙の後。レナンが溜息を吐いた。

様子を伺っていた医師が、機材を鞆に片付けながらレナンに同情した。

「妊娠していたから、安定期までいたということか」

「うん」

「ねえ、リオン。私の体はいつ返してくれるの？想いをとげたのでしよう？もついででしょ？」

「ごめん。この子を育てたいんだ」

「ちよつと、それって」

「捨てられちゃったけど。フォルティー様の子を育てたい」

「おいおい」

カホは、呆れて座り込んでしまった。

この自己中アホにどうしたら、自分の悔しい思いが伝わるのか。
怒鳴ってもどうにもならない現状に、疲れてしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5507n/>

マイライフ・マイアフター

2011年9月30日14時53分発行